

あらしの前の木と鳥の会話

小川未明

青空文庫

ある山やまのふもとに、大きな林はやしがありました。その林はやしの中には、いろいろな木きがたくさんしげっていました。一番ばんの王おうさまとも見みられたのは、古ふるくからある大おおきなひのききの木きがありました。

また、この林はやしの中には、たくさんな鳥とりがすんでいました。しかし、なんといつても、その中なかの王おうさまは、年としとつたたかでありました。多おほくの鳥とりたちは、みんな、このたかをおそれていました。

ある日ひのこと、古ふるいひのききの木きと、たかどが話はなしをしたのであります。

「いま、人間にんげんは、ひじょうな勢いきおいで、いたるところで木きを伐きり倒たおしている。いつ、この林はやしの方ほうへも押し寄よせてくるかもしれぬ。人間にんげんは、りこうかと思おもうと、一面めんは、ばかで、自分じぶんから火ひを出だして、自分じぶんの住すんでいる家いえも、また、せつかくりつぱに、仲間なかまのためになつた街まちも、みんな焼やいてしまう。そんなことは、俺おれたちが考かんがえたつて、想像そうぞうのつかないことだ。そうして、家いえが失なくなつたり、街まちが焼やけてしまつと、あわてて大急おおいそぎで、俺おれ

ちのいる方へやってくる。そんなにまで俺たちは、人間ののために尽くしているのに、ありがたいとは思っていない。」と、ひのきの木は、話しかけました。

くるくるとした、黒い、鋭い目をしたたかは、これをきいていましたが、

「人間というやつほど、わがままなものはない。おまえさんが、そう怒んなさるのも無理はない。私たちだって、これまでずいぶんこらえてきたものだ。」と、たかは、おうようにいいました。

「しかし、あなたがたは、自由に飛んで歩ける身体だから、なにも、人間のいうとおりにならなくてもいいのだ。人間のいないところへいつてしまえば、つらいめにもあわなくてすむというものだ。」

「ひのきの木さん、おまえさんも、年をとつて、すこし、もうろくなさつたとみえる。私たちの仲間が、人間ののために、どれほど、働いて、どれほど、いじめられてきているか知れたもんでない。だいいち考えてみなさるがいい。人間は、馬や、牛や、犬や、ねこのために、病院まで建ててやっているのに、私たちの病院というようなものを、まだ建てていない。こうした大不公平は、ここに挙げ尽くされないほどある。これに対して、あなたがた同様、私たちが、黙っているものですか。」と、年とつたたかはいい

ました。

空そらを暗くらくするまでしげつたひのきの木きは、黙だまつて、たかのいうことを聞きいていました。

「おい、兄きょうだい弟だい、もうよく話はなしがわかつた。俺おれたちは、みんな人にんげん間の仕し打うちに對たいして不ふ平へいをもっているのだ。しかし、まだ、これを子し細さいに視し察さつしてきたものがない。だれかを、人にんげん間のたくさん住すんでいる街まちへやつて、検しらべさせてみたいものだ。そして、よくよく人にんげん間げんが、不ふ埒らちであつたら、そのときは、復ふく讐しゆうしよう……そうでないか？」と、ひのきの木きはいいました。

二

たかは、曲まがつたくちばしを、木きの皮かわで磨みがいて、聞きいていました。

「それは、いいところに氣きがついたものだ。さつそく、視し察さつに、だれか、やつたらいい。おまえさんには、だれがいいか、心こころあたりはありませんか。」と、たかは、ひのきの木きにたずねました。

ひのきの木きは、うなずきました。

「それは、やはり、人間の姿をしたものでなければ、この役目は、果たされないうらう。幸い、あの乞食の子を、にぎやかな街へやることにしよう。あの子には、俺も、おまえも、いろいろ世話をしてやったものだ。」

「私は、あの子に、他所から、くつをくわえてきてやった。また、着物をさらつてきてやったことがある。」と、たかはいいました。

ひのきの木は、身動きをしながら、

「俺は、あの子に、いろいろな唄の節を教えてやったものだ。また、あの子が父親といつしよに、この木の下にいる時分は、雨や、風をしのいでやったものだ。蔭になり、ひなたになりして護つてやったことを、あの子は、よく憶えているはずだ。あの子は、俺の荒い肌をさすつて、小父さん、小父さんといったものだ。」

「あの子なら、いいだろう。」

「あの子なら、だいいちに、心から俺たちの味方なんだ。」

こういつて、古いひのきの木と、年とつたたかとは、話をしていました。

夕方になると、父親と子供とは、ひのきの木の下に、どこからか帰つてきました。子供は、木の枝で造つた、胡弓を手に持つていました。

ふたり
二人は、そこにあつた小舎こやの中に、身を隠かくしました。

とう
「父ちゃん、さびしいの。」と、子供こどもはいいました。

「ああ、さびしい。」

とう
「父ちゃん、なにか、おもしろい話はなしをして、聞きかしておくれよ。」と、十一、二の男おとこの子は、父親ちちおやに頼たのみました。

「そんなに、さびしければ、あした街まちへいつてみる！ 町まちへゆきや、おもしろいことがたんとあるぞ。独ひとりでいつて見てこい。おらあ、ここに待まっている。帰かえったら、見みてきたことをみんな聞きかしてくれ。」と、父親ちちおやはいいました。

こども
子供は、黙だまっていました。

このとき、頭あたまの上うへのひのきの木きに風かぜが当あたって、鳴なっていました。その音おとを聞きいていると、

「それがいい。それがいい。」といっているようでした。

「いつてみようかしらん。あしたは、天てん気きだろうか？」と、子供こどもはいつて、小舎こやの入り口いりぐちから、くりのまりのような、毛けののびたくびを出だして、空そらの景色けしきをながめると、林はやしの間あいだから、雲くも切れのした、青あおい空そらの色いろが、すがすがしく見みられたのです。そして、たかの空そらを舞ま

つて鳴く声が聞こえました。

「いってしろ！ いってしろ！」
たかは、こう叫んでいました。

三

乞食の子は、胡弓を持って、街へやってきました。父親は、村を歩いて、子供は、一人で街へきたのであります。

いい天気でありました。ある橋のところへくると、馬が重い荷を車につけて、引いてきかかりました。そして、そこまでくると、もう歩けなそうに、止まってしまいました。馬は、苦痛にたえかねて跳ね上がりました。

これを、見ている人たちは、みんなびつくりしました。
「ちと、荷が、重すぎるのだ。」といった人もあります。
「かわいそうに。」と、馬に、同情した人もあります。

乞食の子供は、どうなることかと思つて、しばらく立つて見ていました。そのうちに、
 とうとう馬は、橋を渡つて、重い荷車を引いていつてしまいました。このとき、先刻、
 馬を「かわいそうに。」といった人が、そばの男に向かつていつたのです。

「人間は、ああして、馬や、牛をずいぶん思いきつた使い方をしているが、幸いに馬や、
 牛がものをいえないからいいようなものの、もし馬や、牛が、ものがいえたら、きつとそ
 んな使い方はできないだろう。けつして、黙つてはいないからね。ものがいえないで幸い
 だ。」といいました。すると、相手の男は、それに、答えて、

「たとえ、ものがいえなくても、馬や、牛や、また、ねこや、犬が、笑つたり、泣いたり
 したら、どうだろうね。」といいました。

「どんなに、気味の悪いことか。」と、二人は、こういつて笑いました。

子供は、この話を帰つたら、父や、山の木や、鳥に、話してやろうと思ひました。

子供は、街を歩いていきますと、鳥屋がありました。大きな台の上で、男が、三人も並ん
 で、ぴかぴか光る庖丁で鶏の肉を裂き、骨をたたき折つていました。真っ赤な血が、
 台の上に流れていました。その台の下には、かごの中で他の鶏が餌を食べて遊んでいまし
 た。

鳥屋とりやのまえ前に、二人ふたりの学生がくせいが立たつて、ちよつとその有あり様さまを見てゆきすぎました。子供こどもは、「なんとというむごたらしいことだろう。」と、思おもいました。そして、自分じぶんも、学生がくせいの後うしろについて、ゆきかかりますと、学生がくせいが、話はなしをしていました。

「鶏にわとりというやつは、ばかなもんだね。仲間なかまが殺ころされてる下したで、知しらぬ顔かおをして、餌えを食たべているんだもの。」といいました。すると一人ひとりは、それを打ち消けすようにして、
「人間にんげんだつて同じおなじじゃないか、毎まい日にちのように、若わかいもの、年寄としよりの区別くべつなく死しんで墓はかへゆくのに、自分じぶんだけは、いつまでも生いきていると思おもつて、欲よく深ふかくしているのだ。」と
いいました。

子供こどもは、これを聞きいて、なるほどと思おもいました。

四

子供こどもは、いちばん、街まちの中なかのにぎやかなところにきかかりました。
彼かれは、小ちいさな手てに持もつている胡弓こきゅうを弾ひいて、風かぜから習ならつた、悲かなしげな唄うたをうたいはじ
めました。すると、通とおる人ひと々びとは、みんな不思議ふしぎな顔かおつきをして、子供こどもを見送みおくりました。

そこには、きれいなカフェーがありました。多くの若い女が、顔に、真っ白に白粉を塗つて、唇には、真っ赤に、紅をつけていました。そこで、やはり、その女たちも、いい声で、唄をうたつていましたが、子供が、風から習つた、悲しい唄をうたつてきかかりますと、みんなが黙つてしまいました。

子供は、カフェーをのぞきました。ここなら唄をうたつたら、お銭をくれるであろうと思つたからです。円いテーブルが幾つもおいてありました。その一つのテーブルに、男が、酒に酔つていい気持ちでいました。対合つて腰をかけている、白粉を塗つた女も、すこしは酔つていました。テーブルの上には、ビールのびんが、港の船のほぼしらのように並んでいきます。男は、ガブ、ガブ、みんなそれを飲んだものと思われました。

女の声で、なにかいったようですが、それは子供の耳に、よく入りませんでした。それよりも、子供は、二人が、酒を飲んで、すぐそばに、かやの若木が、鉢に植わつて、しかもその根が、真っ白に乾いているのを見ました。

ビールを、ガブ、ガブ、飲むかわりに、一杯の水を、かやの根もとにやればいいのにと、子供は、思つたのです。

「この木に、水をやらんと枯れてしまうよ。」と、子供はいいました。

すると、酒に酔っている男は、怒りました。

「なに、いらんことをいうのだ。さつさといつてしまえ！」と行って、小さなコップに残っていた、ウイスキーを子供の顔に、かけました。子供は、目から、火が出たかと思いましたが。

子供は、その日の暮れ方、涙ぐんだ目つきをして、ふもとの林の中へ帰ってきました。小舎の中には、父親が待っていました。

子供は、この日、街で見てきたいっさいを父親に向かって話しました。古い大きなひのきの木は身震いをしました。

「いま、子供のいったことを聞いたか。」と、年とつた大だかに向かっていたいました。

「人間は、すこしい気になりすぎている！ ちつと怖ろしいめにあわせてやれ。」と、たかは、怒りに燃えました。

「俺たちは、今夜、あらしを呼んで、街を襲撃しよう。」と、ひのきの木は、どなりました。

「私たちの力で、ひとたまりもなく、人間の街をもみくだいてやろう。」と、たかは叫びました。

す。
たかは、黒雲に、伝令すべく、夕闇の空に翔け上りました。古いひのきは雨と風を呼ぶためにあらゆる大きな枝、小さな枝を、落日後の空にざわつきたてたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦ 講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

※表題は底本では、「あらしの前《まえ》の木《き》と鳥《とり》の会話《かいわ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.azora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あらしの前の木と鳥の会話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>